



放課後の
秘密



佐倉 真白

Sakura
Mashiro



また、
あした。



ここにいと
なんだか少し
ほっとする。



近所の
親戚のおじさん

うるさいけど、
やさしいひと。

After
School



放課後の秘密

佐倉真白は風呂上がりには牛乳パックを冷蔵庫から失敬しつつリビングのソファへと飛び込んだ。

この時間はニュースしかやっていなくてつまらないな。

夕方のニュースは一足早めにイルミネーション始まったのだ、どこかの山の紅葉が見頃だのを伝えている。

リモコン片手に冷めた目で画面を流し見しつつ、牛乳パックに口を付けていると、

「こらっ！」

と、スパンと後頭部に平手が飛んだ。

たいして痛くはないが条件反射に後頭部を擦りつつ後ろを振り返ると、仁王立ちの母親が立っていた。

「げ」

「牛乳パックの直飲みはやめなさいって何度もいってるでしょ。お行儀の悪い」

ぷりぷり怒りながらコップをローテーブルに置かれ、「はい」と気のなさに返す。ぎっ、と睨みが強くなったので「ごめん」と謝ればため息が返ってきた。

「まあいいわ。あ、そうだ。明日でいいからおじさんのところにお菓子持って行ってくれない？ テスト終わって暇でしょ」

そう言われ、母に小さな紙袋を渡された。紙袋の中身はお菓子のようで、甘い香りがほのかに香る。

「……いいけど、これなに？」

「この間、お母さんとお父さん、コンサートに行ったじゃない？ その時チケットを取ってもらったから、お礼にね」

「ふーん」

「お願いね」

結局コップは使わずに牛乳パックを飲み干して、真白はソファから立ち上がった。

期末テストも明日でラスト。夕飯前に少し勉強でもするかな。

「もうちょつと、頑張るかあ」

テストの最終日は、昼前に終わった。

生徒達は数日にも及んだテストから解放され、皆どこか晴れやかな表情で教室から飛び出していく。

真白もまた、頭に詰め込み過ぎた数式やら語呂合わせの年式だのを振り払うように伸びをしてからカバンを手にした。

「佐倉ー、カラオケいかね？」

明るい隣の席のクラスメイトの声に「わるい」と片手を上げる。

「オカんに用事頼まれててさあ、帰るわあ」

「そっか、また誘うわ」

「おう」

真白は片手を振りつつ教室から出て、家路へ軽快に走り出した。

今日は家には誰もいない。父も母も仕事なのだ。

真白は鍵を開けて家に入り、カバンを玄関において紙袋を拾いあげる。

おじさん、は近所に住む親戚で、で小さなマンションの管理人をしている。

佐倉真白は風呂上がりに牛乳パックを冷蔵庫から失敬しつつリビングのソファへと飛び込んだ。

この時間はニュースしかやっていなくてつままないな。

夕方のニュースは一足早めにイルミネーション始まったのだ、どこかの山の紅葉が見頃だのを伝えてい

る。

リモコン片手に冷めた目で画面を流し見しつつ、牛乳パックに口を付けていると、

「こらっ！」

と、スパンと後頭部に平手が飛んだ。

たいして痛くはないが条件反射に後頭部を擦りつつ後ろを振り返ると、仁王立ちの母親が立っていた。

「げ」

「牛乳パックの直飲みはやめなさいって何度もいつてるでしょ。お行儀の悪い」

ぷりぷり怒りながらコップをローテーブルに置かれ、「はい」と気のなさに返す。ぎっ、と睨みが強くなつたので「ごめん」と謝ればため息が返ってきた。

「まあいいわ。あ、そうだ。明日でいいからおじさんのところにお菓子持って行ってくれない？ テスト終わって暇でしょ」

そう言われ、母に小さな紙袋を渡された。紙袋の中身はお菓子のようで、甘い香りがほのかに香る。

「……いいけど、これなに？」

「この間、お母さんとお父さん、コンサートに行ったじゃない？ その時チケットを取ってもらったから、

お礼にね」

「ふーん」

「お願いね」

結局コップは使わずに牛乳パックを飲み干して、真白はソファから立ち上がった。

期末テストも明日でラスト。夕飯前に少し勉強でもするか。

「もうちょっと、頑張るかあ」

テストの最終日は、昼前に終わった。

生徒達は数日にも及んだテストから解放され、皆どこか晴れやかな表情で教室から飛び出していく。

真白もまた、頭に詰め込み過ぎた数式やら語呂合わせの年式だのを振り払うように伸びをしてからカバンを手にした。

「佐倉ー、カラオケいかな？」

明るい隣の席のクラスメイトの声に「わるい」と片手を上げる。

「オカんに用事頼まれててさあ、帰るわあ」

「そっか、また誘うわ」

「おう」

真白は片手を振りつつ教室から出て、家路へ軽快に走り出した。

今日は家には誰もいない。父も母も仕事なのだ。

真白は鍵を開けて家に入り、カバンを玄関において紙袋を拾いあげる。

おじさん、は近所に住む親戚で、で小さなマンションの管理人をしている。

母親はふろうしよとくが羨ましい、とか言っていたが、中学生の真白にはそれがどういうものなのか、よくわからなかった。

マンションに向かうと、おじさんはアパートの周囲の掃き掃除をしているところだった。

すぐに真白に気付き、太めの腹を揺らしながら手を振った。

マンションに向かうと、おじさんはマンションの周囲の掃き掃除をしているところだった。

すぐに真白に気付き、太めの腹を揺らしながら手を振った。

「あ、真白くん。いらっしやい」

「こんにちは、おじさん。これ母からです」

「あ、わざわざありがとう。よかったら上がっていきなさい。お茶を淹れてあげる」

真白は恐縮してみせつつ、おじさんの後に続いて部屋に上がり込んだ。

部屋の隅の机の上にはノートパソコンが開かれた状態で置かれている。

おじさんは管理人の傍、小説家をしている、と聞いたことがあった。

「今は何を書いているの？」

お茶を淹れて持ってきたおじさんに聞くと、彼はふふ、と笑った。

ローテーブルにお盆を置く。その上にはお茶の入った湯飲みが二つと饅頭が載っていた。

「粒あん、好きだったよね？」

頷きながら饅頭を手にとった。餡子は結構好きだけど、なんか年寄りくさい好みかなあ、と思ってクラスメイトには言えずにいるのだ。だが、ここでなら隠す必要はない。

お茶は、あんまり好きじゃないけど。

あつという間に饅頭を食べきり、手に着いた白い粉をペロリと舐め上げる。

おじさんの、視線に熱が籠もった気がした。

「何を書いているか、知りたい？」

「うん」

上に置かれたお盆ごと、ローテーブルが横にずらされ、空いた場所におじさんが体を置いた。分厚い手が、真白の制服の上から膝に触れる。

「あ……」

熱い体温にゆっくりと太腿を撫ぜられ、思わず声が漏れた。

ときどきと、痛いくらいに心臓が鼓動する。

「おじ……さん……」

「中年の男がね、女の子をね、じっくりと可愛がる話だよ。真白くんは男の子だけど、せっかくだから、じっくりと、教えてあげようか」

熱い掌が、真白の太腿の線をなぞるようにして内側に降りてくる。真白の小柄な方がびくりと震えた。

この熱を、真白は部屋に來た時から、期待していた。

おじさんの顔が近づいてきて、真白は目を閉じて薄く唇を開けた。

指先に顎を掬い取られ、柔らかな感触が唇に押しつけられる。ちゅ、とリップ音がして一度離れ、次に唇が触れた時。おじさんの舌が、口の中に潜り込んできた。

お茶の苦味を纏った唾液を、塗り込めるようにおじさんの舌が真白の小さな口内で蠢く。粘液を纏った太い舌先で上顎を擦られ、真白はさすがに男のシャツを掴んだ。

「あんっ、はぁ、教えて、いっぱい」

「……お膝において」

おじさんと、こういう事をするようになったのはいつだったか。

考えてみれば、最初から特別だったわけではない。

近所に住む親戚のおじさん。

ときどき遊びに行けば、お菓子やお茶を出してくれる。

真白にとっては、それだけの人だった。

変わったのは、あの日。

おじさんの部屋で、机の上に置かれていた小説を手にとったことがきっかけだった。

それは所謂官能小説で。

そこから少しずつ、二人の間に秘密が増えていった。

促されるまま、おじさんの逞しい腿の上に腰を下ろす。男の硬い骨肉の感触が、薄いズボン越しに直に伝わってきて、それだけで下腹部がキュンと切なく疼いた。

真白は幼い腕を太い首に回した。

「さあ、最初はキスだ。真白くんは上手にできるかな？」

ぴちゃぴちゃと子猫がミルクを飲むような音を立てながら、男の舌と自身のそれを絡め合う。ざらついた舌べらを舐め、僅かに生臭い唾液を飲み下し、口端を伝う唾液の糸を指先で拭いた。

おじさんの、芋虫のように太い指先が器用に動いて真白の学ランのボタンをぷつり、ぷつりと外していく。

真白はそのまま制服の上着を脱いで床に落とした。

「おじさん、もっと」

おじさんの胸元に縋るようにしなだれかかれば、おじさんは鼻息も荒く真白の首筋に舌を這わせてきた。

「あっ、んんっ」

薄い皮膚の上を熱い舌がゆっくりと辿っていく。それだけで真白はびくびくと背筋を震わせて喘いだ。

「いい子だ、真白くん、とっても上手だよ」

「ほんとう？」

「ああ、可愛くて今すぐ食べちゃいたいよ」

放課後の秘密

発行日：2026年9月某日

著者：かのう。

サークル：まるつと

表紙・本文制作：かのう。

© 2026 かのう。